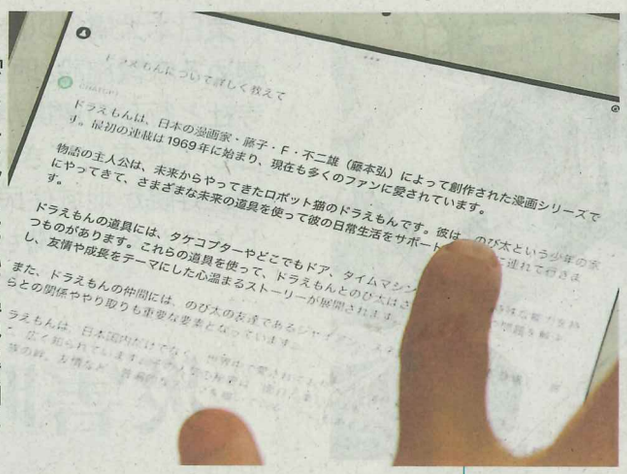
生成AI 使ってみよう

＼ 夏休み 親子で一緒に ／

急速に普及するチャットＧＰＴなどの対話型人工知能（ＡＩ）。子どもの学習面への活用に賛否がある中、文部科学省が小中高校向けの暫定的なガイドラインを示し、学校現場で模索が始まった。親子の時間が増える夏休みに家庭でも向き合い方を考えたい。ベネッセコーポレーション（岡山市北区）の小学生親子向け生成ＡＩサービスを監修した広島工業大の安藤明伸教授（行動科学）に心構えを聞いた。（余村泰樹）



「ドラえもん」について尋ねる質問に回答するチャットGPTの画面（撮影・河合佑樹）

「一人一人の相談に乗ってくれる物知りなパートナー。ただうそつきでもある」。安藤教授はチャットGPTなどの生成ＡＩをそう表現する。ある単語や文章の次につながる言葉を膨大な情報を基に推測し、質問にすらすらと答える一方、回答には誤りも含まれる。「人間と違って声色や表情がないから、信じてしまいがち」と指摘する。

そんな生成ＡＩに慣れるため、安藤教授は「せっかくの夏休み。保護者が一緒になり、子どもと使ってほしい」と勧める。生成ＡＩの多くは未成年の利用に制約を設け、子どもは自由に使えない。例えばチャットＧＰＴは規約で利用対象を13歳以上とし、18歳未満は保護者の同意が必要だ。

生成ＡＩの回答をうのみにしないため、まずはアニメの登場人物など、子どもがよく知る内容をあえて質問すると良いという。記者も試しに大リーグの大谷翔平選手の経歴を尋ねると、出身高校を花巻東ではなく、盛岡工と誤答した。安藤教授は「早い段階で健全な批判意識を持つことも大切」と強調する。

夏休みの課題への活用には注意が要る。文科省のガイドラインでは、読書感想文やコンクール応募で、生成ＡＩの生成物をそのまま自分の作品と装うのは不正行為と強調。詩の創作や美術の表現などでの安易な使用も不適切とした。

一方、効果的な活用法としては、グループ討論でアイデアの参考にして議論を深めることや、英会話の相手に使って自然な表現に改善することを挙げる。

安藤教授は「立場や発達段階が違う異学年での活動に教育的な意義があるように、生成ＡＩとの問答は新たな視点をもたらしてくれる」とする。付き合い方次第で、自らの思考を深めたり整理したりする効果が期待できるとしている。

「ＡＩとの問答で、思いがけない発想にも気付かされる」と語る安藤教授

よく知る内容 あえて質問

文科省指針が示す生成ＡＩの教育効果

メリットや有効な活用法	デメリットや不適切な活用法
● グループ討論でアイデアの参考にすれば議論が深まる	● 批判的思考や創造性を損なう可能性
● 英会話の相手として使え、自然な会話表現へ改善できる	● コンクール応募作品にそのまま使うのは不正行為
	● 個人情報入力は漏えいリスクが生じる

児童の８割以上「使ってみたい」

小学３～６年 ベネッセ調査

ベネッセが6月、全国の小学3～6年と保護者計1032組を対象にしたアンケートでは、児童の5人に1人がチャットGPTを知っており、うち約70％が使ったことがあると答えた。

児童の認知度は「知っている」（20％）「聞いたことはあるがどんなものか分からない」（28％）「知らない」（52％）。知っている児童の利用頻度を聞くと「よく使っている」（19％）「時々使っている」（22％）「試しに使ったことがある」（28％）で、計69％に利用経験があった。

児童の利用意向は「たくさん使いたい」（25％）「少し使ってみたい」（61％）と肯定的な意見が8割を超えた。利用したい用途を複数回答で聞くと「好きなことを調べる」（58％）「学習での疑問解決」（53％）と続いた。

保護者は、児童の利用に関し「積極的に使ってほしい」（12％）「少し使ってみてほしい」（44％）と過半数が前向きだった。使ってほしい理由は「新技術の活用力を養うよい機会になりそうだから」（34％）「子どもが新しい興味に出合えそうだから」（25％）と続いた。使ってほしくない理由は「自分で考えなくなりそうだから」（51％）がトップだった。

（余村泰樹）